

イギリス労働党と第一次大戦

伊 達 宗 雄

一

第二インターナショナルの大会は一九一四年八月二十三日にオーストリアのウィーンに開かれることになって
いた。ところが六月二十八日にオーストリア皇太子がサラエヴォで暗殺され、オーストリア政府は七月二十三日
セルビアに対して最後通牒を發し、五日後には宣戦した。

七月二十九日、第二インターの事務局はベルギーのブラッセルに緊急会議をひらいた。イギリスからはケア・
ハーディーほか二人がこれに列席した。フランスからはジャン・ジョレスほか四名が参加した。ドイツからは社
会民主党委員長フリーゴ・ハーゼがただひとり参加した。さきにウィーンに予定された大会の場所はパリに変更
され、戦争の危険に対処するために開催の日取りも八月九日に早められた。また、ドイツ社会民主党の態度を表

イギリス労働党と第一次大戦

明することをもとめられたハーゼは、ドイツの戦争参加にはあくまで反対であることをのべ、党は国会においては軍事予算にも反対する決意であることをあきらかにし、満場の喝采をうけた。この緊急会議が可決した決議は、各国の労働運動が戦争反対のデモンストレーションを強化すること、ならびにオーストリア・セルビアの紛争を仲裁によって解決するよう主張することをもとめるとともに、とりわけフランスとドイツの労働者が紛争の拡大をふせぐため各次の政府に圧力を加えることを要望した。

あくる七月三十日にさらに会合したのち、この緊急会議は閉会したが、七月三十一日、ジャン・ジョレスはパリのあるレストランで暗殺されてしまった。

八月一日、ドイツはロシアに対して宣戦し、あくる二日、ドイツはベルギー政府に対し最後通牒を発してフランスへの進撃のためベルギー領内を通行することをもとめたが、ベルギーはこれを拒否し、同三日、ドイツは対仏宣戦とともに、ベルギーに侵入した。あくる四日、イギリスもまた対独宣戦をおこなった。こうして、第一次世界大戦ははじまった。第二インターのパリ大会はついにひらかれなかった。

ジャン・ジョレスの死とならんで、各国の社会主義者たちにとって衝撃だったのはドイツにおける社会民主党の態度であった。八月四日、軍事予算案が国会に上程されると、社会民主党は全議員百十一名一致してこれに賛成したのであった。もつとも、党内で賛否の表決をしたときにはハーゼをはじめとして十四名が反対したが、少数派も党の統制に服して議場では賛成投票した。カール・リーブクネヒトもこの少数派のひとりであった。悲劇の焦点にたったのは委員長ハーゼだった。彼の委員長の辞意はうけつけられないで、ハーゼは、心ならずも軍事予算の賛成演説をしなくてはならなかった。⁽¹⁾

二一

それではイギリス労働党の側はどうであったか。

一九一四年八月一日にはドイツの対露宣戦があつたことはすでにのべた。八月二日、ケア・ハーディー、アーサー・ヘンダーソンその他は、第二インターの指令に忠実に、トラファルガー・スクエアで戦争反対の大デモンストレーションをおこない、イギリス政府が中立をまもるべきことを要求した。

あくる八月三日、すなわちドイツの対仏宣戦の日、午前中に議会労働党は会合してイギリスの参戦に反対することをきめた。そこで、その日の午後の下院において、外相サー・エドワード・グレーがフランスを援助するために参戦しなくてはならない旨の歴史的な演説をしたさいにも、ラムゼー・マクドナルドは労働党を代表して参戦反対の演説をおこなつたのだつた。

だが、八月四日、ドイツ軍がベルギーに侵入したことが報道されると、イギリスの輿論は一変して参戦にかわつた。八月五日、労働党の全国執行委員会が会合したとき、党の戦争反対の態度はすでにかわつていた。執行委員会の可決した決議（のちに議会労働党との共同会合でもそれは裏書きされた）は、対仏支援の約束が国民の知らぬまにあたえられたことを遺憾としているが、戦争反対ということにはふれることを避けて単に、『できるだけ早い機会に平和を回復すること』が労働運動の義務であるとのべているにすぎない。大多数の党員は戦争に協

イギリス労働党と第一次大戦

力する側にまわってしまった。

八月五日、政府が翌日提出するはずの戦時予算に対して労働党はこれに賛成することに決定した。この決定とともに、戦争反対の態度を持っていたマクドナルドは直ちに辞職し、アースー・ヘンダーソンがこれにかわって議会労働党の委員長となった。こうして第一次大戦中のイギリス労働党はヘンダーソンの党となった。

労働党の大勢は参戦派のしめるところとなり、反戦派はケア・ハーディーやマクドナルドなど一握りの独立労働党員だけとなった。このほかに、自由党内にも少数の反戦思想の者がいた。戦争反対の宣伝啓蒙のために、マクドナルドはこれら自由党の少数の有志と手をにぎって、一九一四年九月、民主統制連盟 (Union of Democratic Control) を結成した。この団体は外交政策の研究会ともいうべきもので、秘密外交の廃止、領土併合の廃絶、国際的平和機関の設立および軍縮を要求した。⁽²⁾

労働階級の国際的団結によって戦争を喰止めようという多年の悲願が脆くも崩れさったことに失望落胆したケア・ハーディーは一九一五年九月二十六日逝去した。

(2) 民主統制連盟に加盟した自由党の人々はノーマン・エンゼル、イー・ディー・モレル、チャールルス・トレヴァリアン、ヘンリー・アースー・ヘンダーソンであった。(Henry Pelling, *A Short History of the Labour Party*, 1961, p. 37.)

「叛逆者」、「売国奴」、「親民主義者」等々の非難はマクドナルド一派に及びせられた。それにもかかわらず、この一派を党内にとどめて党の分裂を防いだのはアーサー・ヘンダーソンの功績の一つであった。

一九一五年五月、アスキスを首班とする挙国一致内閣に参加することがヘンダーソンに提案され、彼はこの問題を党の機関にはかかったところ、党の議員団は少数の差でこれを否決したのに党の執行委員会は入閣に賛成した。そこで、この両者の合同協議会で意見の調整をはかった結果、やっと入閣に賛成することにきまつた。彼は意外にも文部大臣に任ぜられたが、事實は労働問題についての内閣顧問であり、閣議にも加わつた。

だが、少くとも最初のうち、政府部内における労働党の影響力はきわめて微弱なものでしかなかった。当然のことながら、戦争という非常時に打たれる諸々の政策は労働運動にはつらいことばかりであった。ヘンダーソンはつまり、政府のとりことなつてこれらの非難の矢面に立たされた形である。

戦時における労働問題の数々をここで詳しくのべる紙面はない。当時のイギリスの情勢のもとで、労働力不足をカバーするために熟練産業に不熟練労働者をわりこませる問題（いわゆる「ダイリニューション」問題）や、徴兵制施行の問題などがいろいろな論議や紛争をまきおこしたのであった。

開戦早々、諸政党は政治休戦を宣して戦争期間中は一切の選挙戦をさしひかえることとなつていた。同様にして、労働組合の側もいち早く産業休戦を宣してストライキ行動に訴えないことを誓い、一九一五年三月には、い

イギリス労働党と第一次大戦

わゆる『大蔵省協定』が結ばれて、大部分の労働組合は強制仲裁に服することを約束した。さらに、同年七月、ロイド・ジョージは新設の軍需大臣として、この約束に法的拘束力をあたえる戦時軍需法の制定に成功した。だが、これらの国民的善意や国法をもってしても、労働者たちの不平不満をまったく抑えきることはできなかった。紛争や争議、さらに非公式なストライキまでもが各地におこつた。

ロイド・ジョージは軍需大臣としての体験から労働問題の重要性を十分に知っていた。したがって、一九一六年十二月アスキスのあとをおそつて内閣を組織するにあたって、労働党の代表者たちと会見して、政府部内において労働党に重要な地位と発言権をあたえることをのべ、鉱山および造船業の国家統制や効果的な食糧割当の施行などを公約した。労働党はこれに応じて閣内協力を続けることにきめた。こうしてヘンダーソンは定員五名の戦時内閣の一員として入閣するとともに、労働党からほかにジョン・ホッジが労働大臣に、ジョージ・バーンズが年金大臣に任ぜられた。

四

このあいだも、独立労働党のなかには反戦分子がいて、若い黨員たちは「良心的忌避者」として、召集に応じないで拘置所にいれられるありさまだった。だから、戦争に協力する大多数の黨員と彼等とのあいだの溝は深まるばかりだった。

一九一七年一月のイギリス労働党の大会には、労働組合の側から提案があつて、執行委員会の委員はすべて大

会の投票によって選ぶべきことが、わずかの差で決定された。大会の投票で選ぶこととなれば、独立労働党やフエビアン協会のような社会主義団体は執行委員を出すためには、労働組合側の票をもらわなくてはならない。従ってこの提案は党の指導部から独立労働党を放逐しようとするもので、ヘンダーソンもこれに反対したし、マクドナルド以下独立労働党の面々は憤激して脱退をほのめかした。

しかし、この一月大会では従来通りの方法で執行委員会の顔触れをきめたあとで、この新選挙方法の可否を議題とする措置がとられた。おそらく、分裂をさけるためのヘンダーソンの巧妙な舞台まわしでもあったろう。

こうして問題は一年間ひきのばされた。そして、この一年間には、また、数多くの事件がおこって、この問題の尖锐なかどをすっかりすりへらしてしまった。

五

一九一七年におこった事件のうち、もっとも大きなものは三月および十一月におこなわれた二回のロシア革命だった。

二回のロシア革命がイギリスの政界や労働界にあたえた影響を語ることはここでは省略するほかはない。が、イギリスにおいても左翼的分子や戦斗的分子の士気がたかまったことは容易に想像されるところである。第一次ロシア革命ののち、六月に統一社会主義協議会の主催でひらかれたリーズ会議などもその一例である。⁽³⁾ロイド・ジョージはロシアを連合国側にとどめておきたいと念じ、ヘンダーソンに命じて三月革命後のロシア

イギリス労働党と第一次大戦

を訪問させた。ソヴィエット訪問からかえったヘンダーソンは、ロシアをわれわれの陣営にのこしておくためには、媾和条件について彼等と共同して研究をすすめることが最良策だという見解を抱くようになった。

また、国際社会主義者会議をストックホルムにひらくという提案があったが、ヘンダーソンはこの会議に非常な関心をしめし、イギリスからも是非代表をおくることを要請し、このことにあまり乗気でない労働党を説得してやっと労働党特別会議でそれを承認させた。ところが、戦争のさなかに敵国の代表と同じ会議に出席するようなことが是認されようはずがない。ヘンダーソンが戦時内閣の一会合によばれて出かけていくと、彼は入室を許されないで、なかで他の同僚たちが彼の取扱いを審議するあいだ、ドアのそとに待たされた。結局、彼は首相から辞任をもとめられ、憤然として辞意を表明して退去した。ヘンダーソンの辞表は八月十一日に提出された。これが有名な『ドア・マット』事件であって、これもロシア革命のイギリスにおける影響の一端といえないこともない。もともと、ロイド・ジョージはロシア関係の問題ではヘンダーソンの見解に同情的であったのだが、その他の閣僚の反対を抑えきれなかったのである。⁽⁴⁾

しかし、ロイド・ジョージはこの事件をしばらく秘密にしておき、その間に労働党との関係の悪化をふせぐことに努力し、ヘンダーソンの後任としてジョージ・バーズを戦時内閣に入れるとともに、あらたに労働党議員のジョージ・ワードルを起用した。こうして労働党の閣内協力の体勢は従来どおりつつづけられた。

(3) リーズ会議の詳細は左記を参照。

Ralph Miliband, *Parliamentary Socialism*, 1961, p. 55.

(4) ストックホルム会議問題とヘンダーソンの関係については左に詳しい

六

『ドア・マット事件』はイギリス労働党の歴史に一転機を画するものであった。国外にはなたれたアーサー・ヘンダーソンはそれからのち、労働党の強化に全精力をそそいだ。この場合、彼がその円満な性格からラムゼー・マクドナルドとも親しく、また、シドニー・ウェップの企画の才能を大いに尊重しており、いわばこの両者の間の潤滑油として作用したことは、党のために大きなプラスであった。

一九一七年八月以降、ヘンダーソンを中心としておこなわれた改革を列記すると次のとおりである。

一、一九一七年末に『戦争目的についての覚書』を発表したこと。これはヘンダーソン、マクドナルド、ウェップの三人の起草したもので、労働党執行委員会や労働組合会議の議会委員会の承認するところとなった。この覚書は国際連盟の設立、国際紛争調停機関の設置、アフリカ諸植民地の国際信託制、原料供給などの経済問題を取扱うための国際行動、等々を要請しており、直後に発表されたウィルソン米大統領の十四項目と趣旨を同じくしている。

一、労働党の憲章を改正し、特に新たに個人加入の途をひらいたこと。改正憲章案はウェップの助力のもとにヘンダーソンがつくったもので、地方労働党には個人の加入をみとめている。従来は、個人加入がみとめられな

かったので、党員となりたい個人はまず労働組合か社会主義団体かに入会するほかに途がなかった。改正案によると、党の執行委員会の定員は二十一名、そのうち五名は地方労働党の指名するもの、四名は婦人に割りあてられ、残り十二名は労働組合と社会主義団体に割りあてられる。組合と社会主義団体の間にはなんらの差別もなくされている。上記一九一七年大会の決定により、執行委員はすべて大会において選出される。

この改正憲章は一九一八年二月のロンドン大会で可決されたが、そのさい、執行委員の定員は二十三名に修正増員された。

同時に、この改正憲章の第四条「党の目的」は左のとおり、労働党が社会主義の党であることを結党以来はじめて明記している。

『生産手段の共有の基礎の上に、筋肉労働者および頭脳労働者の勤勞の全生産物とそれのできるかぎり公正な分配とをこれら労働者に確保し、各産業またはサービスの人民による管理統制の最善の制度を確保すること。』

一、『労働と新社会秩序』と題する党の政策宣言を公表したこと。この宣言はシドニー・ウェップの起草にかかり、一九一八年六月の特別会議で採択された。この政策宣言はその後およそ三十年の長きにわたりイギリス労働党の政策の基礎をなした重要なものであった。

『労働と新社会秩序』は、まず最初に、古い社会秩序がこの戦争によって、その基礎そのものから、くずれさ

ったことを宣言している。

『個人主義的な資本家生産制度は致命的な打撃を受けた。……わが労働党はいまここに築かれるものが新しい社会秩序であるようにしなくてはならない。そしてこの新社会秩序の基礎は、争いにおかれないうで友愛におかれるものであり、単なる生存の手段をもとめる競争的斗争にはおかれないうで、筋肉または頭脳をもって仕事にくわわるすべての人々の利益のために、生産および分配において綿密に計画された協力をするにおかれるものである。また、富のできるだけ大きな不平等にはおかれないうで、この世にうまれた各々の人について物質的境遇の健全な平等へと組織的にちかづくにおかれるものであり、さらに、従属国、従属種族、従属植民地、従属階級または従属性別に対する強制的征服にはおかれないうで、産業においても政府においても、民主制の特徴であるところの平等的な自由と一般的な同意の意識と権力に対するもつともひろい参加におかれるものである。

……社会のあらゆる活動部面の民主的な統制という共通の基盤のうえに立って、われわれがたてようとする四本の柱は次のとおりである。

- (a) 国民最低限の全面的施行
- (b) 産業の民主的統制
- (c) 国家財政の変革
- (d) 余剰の富は万人の福祉にあてること

さらに、『労働と新社会秩序』はこの四本の柱のことをもっと詳しく解説していく。

イギリス労働党と第一次大戦

ここにいう『国民最低限』(National Minimum)のなかには、賃金、労働時間、保健、安全、住宅、教育、公共事業等々について国民に保証されるべき最低限がふくまれるばかりでなく、失業の防止策までがふくめられている。産業の民主的統制のためには、選挙制度の改革、上院の廃止、土地の公有、鉱山、鉄道、運河、電力、海運等の国有化、石炭配分の公有化、保険事業、酒精飲料業等における私的利潤の絶滅などが提案されている。第三に、財政については『できるだけ犠牲の平等に近づけるために』租税および相続税の大幅な累進制や資本課税などが説かれている。最後の四本目の柱としては、以上の諸方策によって得られる余剰の富を、教育、衛生、学術の奨励、病人および失業者に対する社会的給付などに用うべきであると述べるとともに、党の外交政策にふれて、帝国主義的侵略への反対、各種民地の自治にもとづく帝国会議、超国家的な国際連盟の設立などを提唱している。⁽⁵⁾

(5) Margaret Cole, *The Story of Fabian Socialism*, 1961. p.173.

八

こうしてイギリス労働党は第一次大戦のさなかにその憲章を改正してはっきり社会主義をめざす政党たることを宣言するとともに、個人加入のみちをひらいて、労働組合の政党から国民の政党へとすすむ第一歩を踏みだした。そのうえに、選挙民一般に訴える政策宣言も用意された。

一九一八年十一月十一日第一次大戦が終りをつけたとき、党はなおロイド・ジョージ内閣に数名の閣僚を出しており、彼等は権力の座にすわりつづけることをのぞんだが、ヘンダーソンは党の執行委員会を説いて戦時協力を打ちきることを主張した。十一月十四日の特別会議の結果、労働党は閣内協力の終了を決定した。この決定に服しないバーンスは脱党してロイド・ジョージ内閣にとどまった。しかし、労働党はここに在野の反対党の立場にもどり、独自の政策を国民に問うこととなった。